

「日本社会と道徳」——豊中ロータリークラブ教育フォーラム（2018年1月27日）

畑田耕一 澤木政光 村司辰朗 宮田幹二 井上暎夫 尾野光夫 篠原厚 矢野富美子

目次

	頁
第1章 はじめに	2
第2章 道徳とは	2
第3章 あるべき姿の道徳に満ちた社会が出来上がるにはどんな教育が行われるのがよいのか	5
3.1 社会に出て今まで経験したことのない立場に立った時に間違いのない判断のできる人を育てる教育とは	6
3.2 人は何のために勉強するのか	7
3.3 人は、考えてから行動するのか、行動してから考えるのか	9
3.4 教育を受ける権利と教育を受けさせる義務—子どもが学校で勉強することの意味を考える	10
第4章 最近相次いで起こった大学・会社における非道徳的に行いについて	13
4.1 大学における論文ねつ造と小・中学校における道徳教育	13
4.2 大学・企業における非道徳的事件とその防止対策	14
4.3 非道徳的事件とサイコバシー	15
4.4 非道徳的不祥事への道徳教育的対処	15
4.5 学校における道徳教育はいかにあるべきか	16
4.6 心の教育を考える	18
第5章 生徒たちはどのような授業を望んでいるか	19
第6章 ロータリーの奉仕の道徳が集約されている四つのテストを奉仕の心として広報したい	21
第7章 メディア・リテラシー 大量の情報を如何に選択するか	25
第8章 まとめ	27
出席者全員のお名前	28

第1章 はじめに

豊中ロータリークラブ（豊中 RC）では、1999 年 2 月に青少年交換委員会の主催で第 1 回青少年交換 フォーラムを開き、海外からの留学生、留学経験のある日本の青年にロータリークラブ会員が加わって、外国の若者が日本で学び、仕事をする上での問題点を話し合った。その折の話題は、日常生活における文化、習慣の違いから日本の教育問題にまで及んだ。2000 年度の第 2 回フォーラムでは、国際協調の場での文化や人間の間には立ちどころの壁について意見交換を行い、異なる文化・風習を担う若者が、ともに学び、ともに働くにはどのようなシステムや工夫が必要かについて話しがはずんだ。その後このフォーラムの話題は次第に教育関係の問題が多くなり、教育関係者、外国からの留学生を含む大学生、高校生ならびにロータリアン、が教育問題を語り合う場となり、「豊中 RC 教育フォーラム」と名付けて現在も活発に続けられている。最近、フォーラムの成果はクラブのホームページなどに逐次公表されている。また、大阪公立大学共同出版会の「双方向授業が拓く日本の教育—アクティブ・ラーニングへの期待」（ISBN978-4-907209-69-8, 2017 年）は、2011 年 1 月 22 日の教育フォーラム「学校教育における双方向授業を考える」が切っ掛けになって生まれたものである。

道徳については、文科省の教科化の方針発表を受けて、道徳教育の問題についていろいろ議論をしていく必要があると考え、2016 年は「小学校・中学校における道徳の教科化に伴う諸問題」、2017 年は「小・中・高等学校における道徳教育」と題してフォーラムを開催し、議論を深めてきた。本 2018 年 1 月 27 日は、「日本社会と道徳」を主題として、家庭、学校、社会・生涯教育の観点から道徳の問題を話し合った。いかなる社会にも道徳は存在する、あるいは存在しなければならない。それとともに大事なことは、道徳がその社会の運営・管理上で適正に機能しているかどうかについて、社会の構成員が常に気を配っていることである。世の中では商家や企業などの職業人が経済活動を行っている。そこで商業道徳が正しく機能しなければ混乱が起こる。この混乱には金銭管理の問題が付きまとうので、問題はさらに複雑である。昔は日常生活における道徳が絡む問題の解決は、誰かが特に気を使わなくても、何人かの生活の知恵の集積によってごく自然に解決されていた。その社会機能が消えかかっているのは、一つの家は何世代にもわたって人が住んでいるのが普通であった昔と違い、今は、一世代あるいは二世世代だけの家族が住まう家が増え、それにつれて家同士の付き合いも疎になってきているのが一因と言われている。ではどうすればよいのか。それを真剣に考えようとしたのがこのフォーラムである。

この 2018 年のフォーラム参加者全員の所属と氏名は文末に記した。

第2章 道徳とは

道徳と社会のかかわりについて話を進めるに当たって、先ず、道徳とは何か、道徳の定義について少し考えておかねばなるまい。参加者の道徳に対する考えの最大公約数のようなものを頭に入れた上で、社会と道徳について議論をしないと、議論が行き詰まったり誤解を招いたりする怖れがあると思うからである。

「私は剣道をやっていますが、道の付くものはたいてい何かと向き合うことを意味すると考えています。例えば、剣道は目の前の対戦相手と向き合い、華道は花と向き合う。何かと向き合えば、その向き合っている相手と何らかの形でかかわりあうこととなります。そうすると、どのようにかかわりあうべきかを考えねばなりません。この考え方は、同じように道という文字が付いている道徳にも通じるのではないかと思います。すなわち、道徳とは関わり合う相手の気持ちを察し、考えることを通して、自分の行動を決定することを意味すると考えています」というのは、高校生A君の意見である。一言でいえば、「道徳とは相手のことをよく考えて自分の行動を決めること」となるのであろうか。

「私は以前、この世に生まれるというのは、本当に奇跡的なことだよ、と言われたことがあります。この世に生まれたのは、自分一人の力で出来たことではなく、自然の摂理の下で起こったことだということをいつも強く感じています。地球は太陽の周りを回っているわけですが、そのおかげで植物も動物も、また人間も共に生きていられる訳です。つまり、自分と自分以外の全てが共存していくためには、道徳という規則が必要なのだと考えています。人間は一人では生きていけない。人と人、人と植物、人と動物、あるいは、人と山でも土でも何でもよろしいですが、自分を囲むすべてのものと向き合って、どういうふうに生きていくかを考えるのに道徳が要るということだろうと思います」という発言は、ロータリーパストガバナーの意見である。自分を囲むすべてのものといかに付き合うかを決めるには、ある種の規則が要る。それが道徳であるという、長年のロータリー生活で考え抜いた結論ともいうべきで、説得力のある定義・考え方のように思う。

「ロータリーの四つのテスト(The four-way test)は非常に分かりやすい道徳的規範である」という名誉教授IIの意見も出たが、これについては、第6章であらためて議論することにしたい。

「私は、社会で生きていくなかにあって、自分の行動について、周りが何を期待しているか、それが、周りの人たち、あるいは自然環境にとって、心和む結果をもたらすかどうかということを考えながら行動するのが、道徳の基本であると考えています」とは、長年高校教育に努力を続ける教員Pの考えである。

「道徳を考え、道徳を語るのであれば、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』をぜひ読んでほしい」という意見が名誉教授IIから出された。この本は、貧困、いじめなどのテーマに対してどう向き合うべきかを、主人公である中学生コペル君の生き方を通して子どもたちに語り掛ける道徳・哲学の書である。「人間は、元来、何が正しいかを知り、それに基づいて自分の行動を自分で決定する力を持っている」という意味のことを述べた上で、「僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから誤りを犯すこともある。しかし、僕たちは、自分で自分を決定する力を持っているからこそ、誤りから立ち直ることもできるのだ」(岩波文庫2018年2月26日版255～257頁)と主張している。吉野の考えの受け取り方は人によって若干の違いはあるだろうが、道徳を語る前に、私とは一体何なのか、自己とは一体何なのか、を明確にしておくことを求めていることは間違いない。

他者の定義には、自分以外のものというような言い方が通用するが、自分とは何かを語るのは非常に難しい。ロータリークラブ青少年奉仕委員長長の一人RIは、「自分とは周りの人たちに生かされている存在です。したがって、自分を生かしてくれている人たちが自分に何を求めているかを、想像力を活用して探り当て、

自分の力で実行する、これが道徳です。例えば、電車で座っていて前に高齢の人が来られた時には無条件に席を譲るのではなく、その人の表情や仕草から見て席を譲るかどうかを決めるのがよいのです。高齢だからという理由だけで席を譲ると、『いや、結構です。年寄扱いしないで下さい』と言われるようなこともあり得ます。ただ単に高齢だから席を譲るのではなくて、その人の『あ、これは疲れておられるな』というのを感じとって『どうぞ』と譲るのがいいのです。自分がして欲しいと思うことを相手にもしてあげるというのではなくて、相手がして欲しいと思っていることを、してあげる、そのための行動を自分の力で起こすというのが道徳的に行いだと思っています」と述べている。これは、自己とは、相手がして欲しいと思っていることを、自分の意志と力で実行できる存在である、と言っておられるものと理解できる。「一般社会の中で、その立場を正確に判断する能力を持つ人が自己としての存在たり得る」という元高校のベテラン教師Qの考えとは、少し別の観点からの自己観と言えよう。

ここで、ロータリー創立時のポール・ハリスらが、「自分たち仲間の集まりだけでも、まともな社会に仕上げよう」と思い続けるうちに、次第に「自分たちのことだけを考えていたら未来はない」ことに気づき始め、遂に他者への奉仕、すなわち、利他の心に芽生えて、親睦と奉仕を根本原理とするロータリーを作り上げていった過程を思い起こしていただきたい。このときのポール・ハリスらの思いは、「自分とは、言行すなわち言葉に発したり、行動を起こしたりすることを自らの意志と力で行うことのできる存在である」というロータリーパストガバナーの発言に通じるものである。

「道徳的思考は、自分よりも他人との関係を大事にするところで成立する」というのは、一人の哲学の徒E君の応えである。彼はこの考えを、次のようにもう少し詳細に、かつ現実的に説明する。すなわち、「人と他の人たち、すなわち家族、友達、社会、あるいは国家の人たちとの関係、すなわち個人を超えた他の人たちとの関係を重視するという立場が道徳を考える上で非常に大事なことです。とは言え、このような道徳的思考が現実の日本社会で理想的な形で実現できるかという、たとえば社会保障を考えてみると、自分たちが稼いだお金をお金のない人たちに与えるべきだという考えに100%の同意を得にくいというような問題があります。日本と他の国との関係に関しても同様です。日本だけが豊かで安全であればそれでよいということではなく、他の多くの貧しい国に対して積極的に援助していくべきだというのが正確で間違いのない道徳的考察でしょう。しかしながら、この国際関係における道徳にも難しい問題が含まれていることはご存知の通りです。道徳の世界における理想的な思考と現実社会における道徳的言行をどのようにしてバランスさせていくのかは、相当難しい問題です」ということである。この道徳的思考の実社会における実現の問題は、次章で詳細に考察したいと思う。

以上のように、「道徳とは何か」についての考えは多様で、人によって少しずつ異なる。しかし、その根底にあるものは、自分を社会の人たちの中において、その人たちとの関係を非常に大事なものと認識し、その関係について慎重に考えてなすべきことを考え、それを周囲の人たちへの影響を十分に考慮しつつ実行する生き方であると思われる。言い方を変えれば、自己が対処する相手の立場、あるいは現場の立場・状況を一所懸命に考えて、自己の意思に基づいて自己の力で実行に移す生き方ということになると思う。もう少し具

体的な言い方をするのであれば、「相手がして欲しいと思っていることをして、相手がして欲しくないと思っていることはしない」のが道徳的対処の仕方ということになる。ただ、これをもって「道徳とは何か」という問いに対する答えとするには、何か釈然としないものが残る。

そこで、「道徳とは何か」という問いを、「道徳的能力とは何か」に置き換えると、明快な答えが出来るようになる。道徳的能力とは、自分が、自分以外の人、さらに人以外の動物・植物、あるいは石とか机とか家の床とか、そういう人以外のものに対して、どういう態度をとるのがよいのかを考え判断する能力である。人間相手の場合は、言葉によるコミュニケーションができるので判断は比較的容易であるが、言葉を持たない相手とのコミュニケーションは、想像力に頼るしかない。また、相手がたとえ言葉を持っていても、心とは違う応えを返すこともあり得る。このような場合には、想像力による判断が必要になってくる。社会において道徳的判断をしてそれを実行するためには、想像力が非常に大事である。すなわち、道徳的能力の根幹の力は想像力 (imagination) である。詳細は、畑田耕一、林義久、渋谷亘「道徳的能力と想像力 www.culture-h.jp/tohroku-osaka/dohtoku-sohzoh.pdf」をお読みいただければ幸いである。

ロータリアンで生け花の先生 R2 の話であるが、「花を活けるときは、花と話をしながら、主役、わき役、出番なし、を花に納得してもらいながら活ける」という。これは、まさに生け花の世界における道徳の話である。「お花を活けるときに考えなければならないのは、その植物が、どこでどんな風にして成長し、切り取られて、私たち生け花をやる者の前に提供されたのかということです。そういうことを無視しては、花は活けられない。花をじっくり見て、自然に生きていた時の形を思い、出来るだけそれに近い形で活ける。一言でいえば想像力を生かして花とお話しながら活けていくことが大切です」ということであった。

第3章 あるべき姿の道徳に満ちた社会が出来上がるにはどんな教育が行われるのがよいのか

これまでに述べてきたことは道徳の基礎編で、ここから先がその応用編ということになる。第2章の最後の道徳的能力の話は、基礎の立場から応用への橋渡しの役目をするものであり、次に述べる職場体験学習は、学校の授業を通しての道徳の応用的実体験と言えるのではなかろうか。

職場体験学習は学校の授業ではあるが、その学習の場は学校ではなく一般の職場である。そこには、その職場独自の専門性がある。しかしながら、職場の専門性とそれぞれの授業との関連性の立場から職場体験学習を論じるのはかなり難しいので、ここでは、学校の授業と社会のいろいろな職場の仕事の根底に存在するもの、すなわち、道徳というキーワードで両者をつないで、話を進めたいと思う。このようなやり方は、必ずしも職場体験学習の本質を極めるものではないかもしれないが、道徳的なものの考え方、また、それが、その職場でどのように生かされていたかなどを考えるのは、意義深いことと考えられるからである。

中学2年の時に職場体験学習に行ったという市立西宮高校のB君は、「本屋さんで本の販売や整理の仕事をしました。それまで全然話したこともなかった女の子と2人でしたが、仕事を一緒にしたり分担したりしながら新しい人間関係を築いていくという点では大いに勉強になったと思います。また、仕事をするの大変さとその意義や、自分が相手に何かをしたことの対価としてお金をもらうことの意味がかなり分かってきました。

これまでは『ちょっとアイスを買おう』と100円出していたお金でしたが、そのお金の重みが感じられるようになってきたのです」と発言してくれた。B君が筆者の提示した「道德」というキーワードに触発されて、1年以上前の職場体験学習の意義を見出してくれたのは大変嬉しいことである。また、同じ西宮高校のC君は、「文化科学館という科学ミュージアムで行事の企画立案にかかわらせていただき、学校の教科という観点からは外れているが、文化祭や体育祭の企画立案で培った能力が社会に出てからも役に立つのだという実感を味わいました。他者との関わりという観点で道德を捉えるならば、この職場体験学習での経験は、社会で仕事をする上での他の仲間や上司との協力・協調の重要性を学べたという点で、大いに意義があったと思います」と、他者との関わりという観点からの道德を観念的ではなく実務的に味わった経験を語ってくれた。

3.1 社会に出て今まで経験したことのない立場に立った時に間違いのない判断のできる人を育てる教育とは

元高校のベテラン教師Qは、「若者は常に新鮮で純粹です。その若者の持つ感性、正しいことは正しいし、おかしいことはおかしいと信じる若者の心を、教師・教育の場がいかに信じてやれるか、ということが非常に大事だったのだと、最近よく思います。人間は、当然ながら生きていく限り変わっていきます。生徒・学生時代に『これが正しい』と信じていたことが、実際に社会に出てみたときに、そのことにいろいろな側面のあることが分かり、考えを変えなければならぬことが起こります。自分の周囲の環境が変わり、立場が変わったときに、その変化にどう対処するべきかをしっかりと判断できる道德的能力を持っていることが、社会に出てからの道德の根本ではないかと思っています。道德的行動を『相手がして欲しいと思っていることをしてあげる』とするのなら、話は比較的単純なのですが、最近、孫同士がおもちゃの取り合いなどで喧嘩しているのを見て、『自分がして欲しくないことは相手にもしない』という決まりも要るのかなと思い始めています。『何かをしない』というのは判断の問題であって、行動の問題ではないからです。孫のおもちゃの話は家庭教育の範囲内のことで、相手のおもちゃを取り上げようとしている子どもに『あなたが自分のおもちゃを取り上げられたらどう思う』と聞いて納得させた上で、最終的には、『あの子どもこのおもちゃを使いたいのだろうから、使わしてあげようよ』というところまで持っていければ大成功です。親や家族が根気よく努力することが必要です」と述べたあと、さらに、「企業の社会活動の目的が地域社会から世界にわたる人々の幸せに貢献することであるのは言うに及びません。しかし、それはその企業が社会に存続することを前提とした上での話です。この前提が成立し難くなった時に、企業は、それが個人であれば私利私欲に走っていると言われかねないようなことを行わざるを得ない事態に追い込まれることがあります。こういう時に、『今こうしなければ会社の危機を乗り切れない』という会社あるいは社員個人の心情と、『いや、ここから先には行ってはいけない』という会社あるいは個人の心情を、如何に上手に調整した上で会社の存続を図るべきか、というのが道德にかかわる難問中の難問です」と続けている。

このベテラン教師Qの指摘は、「社会と道德」にかかわる多くの問題を含んでいる。その中で、自分の孫の行動を例として指摘している部分は、家庭教育と保育園・幼稚園を含む学校教育での親・家族と教員の不断の努力により解決可能な問題であるが、企業・会社にかかわる部分は、家庭教育や学校教育だけでは解決しきれない問題である。生徒や学生全員をこのような問題に対する対処能力を100%有する個人に育て上げたくて、

社会に送り出すことは殆ど不可能に近いと思われる。これは、家庭・学校・生涯教育の問題として、学校・大学が主導権を取りつつ、解決に全力投球していく他はない問題と考える。ただ、この種の問題の解決にその能力に応じて関わるのは国民一人一人の使命であり責務であることを生徒・学生に自覚させる教育は、大学教育を含む学校教育の中で十分に行ってほしいと思う。またその折に、個々の記述の中の会社という語を社会に置き換えたような問題も発生しかねないという指摘も忘れないで欲しい。

このように、道徳の教育・学習は、学校教育だけで終わってしまうものではない。大げさに言えば、人は死ぬまで道徳を学び、勉強するという使命を果たし責務を全うせねばならない。ロータリアンで青少年奉仕に関心の深い医師の一人 R3 は、国民の道徳学習を次のように分析する。すなわち、「子どもの時代から大人になるまでの道徳への関わりを考えると、まず、小さいころは家庭です。そのときに、いわゆる道徳の基本は、普通は親ないしはその家族から教わります。そのあと、学校教育における道徳は、家庭における道徳教育で取得したものに加えて、新しく付き合うことになった人・環境に応じて変わってきます。新しいものが増えて、道徳に対する肉づけが行われるのです。そこを越えて社会へ出たときには、学校の環境とはかけ離れて大きなところで、相対するものも変わり、さらなる肉づけ、ないしは教育が行われるのです。したがって、学校教育における道徳の授業では、将来、社会に出たときの環境変化に対処する注意点や心がけを教えなければならないと私も思っております。ただ、現在は、子どもの頃の家庭での道徳教育が殆どないままに、学校にすべてが委ねられているのが問題です。また、学校における道徳教育が、その重要性と意義を先生方があまり深く認識せずに行われているのではないかという疑念も持っております。道徳の教科化は、このような点に対する文科省による忠告ではないかと私は感じております」ということであった。

この意見は、人の一生における家庭・学校・社会での道徳教育・道徳学習を概観したものである。就学前の保育園、幼稚園も含めた家庭外での子ども同士の付き合いや、教員との関わり合いによる道徳教育・道徳学習が大事であることは忘れてはならない。家庭・学校・社会の基礎となるのは家庭である。家庭を大事にしなければならない。それも、現在の家庭だけでなく未来の家庭も大事にすることを忘れてはなるまい。そうなるためには、学校教育において、大きくなったら仕事をして生活費を取得し、結婚し、状況が許せば子どもを産み育て、次世代を作っていくことが社会の存続に必要なのだという教育を行い学習させることが非常に重要である。それとともに、「社会で仕事をするのが、いかに人々を幸せにし、世の中に貢献することになるのかを子どもたちに認識させねばならない」という水道局職員で二児の母 F の指摘も忘れないでおきたい。これらを怠っていると、医師の発言にあったような、学校を離れてからの道徳の肉づけが出来なくなってしまうのである。

最後に、「学校での道徳教育は生涯教育には持ち越さずに、幼稚園教育も含めて学校教育を終えた段階で自分で重要な道徳的判断のできる人間に育っていて欲しいというのが私の希望です。そして、少し難しい要求ではありますが、学校に繋がる一般社会は、少しずつ新しい社会に変わりつつあるので、それに適合する学校教育を想定して実行する必要があることを理解していただければ幸いです」というロータリーパストガバナーの指摘は、重く受け止めねばなるまい。

3.2 人は何のために勉強するのか

「人は、家庭や学校での教育を通じて道徳だけではなく、いろいろなことを学んで人間として成長し、道徳感を高めた上で世の中に出て仕事をします。すなわち、道徳の実践の場に立つわけですが、そこで立派な地位にいる社会人でありながら道徳的な過ちを犯すことがよくあります。これを防ぐには、学校教育のどこをどのように変えればよいのかを示すのはかなり難しい。文科省のいう全ての科目で道徳を教育し学習させるという方針が徹底して行われることが解決策であるようには思いますが、普段の授業は、なかなかそうはならず、問題とその解答が中心になってしまうのは、日常的には仕方がないことかもしれません。しかしながら、少し離れたところから、『今何のために勉強しているのだろうか』というようなことを考えてみるのも、学校教育では必要なことではないかと今思い始めています」という意見が、名誉教授の一人Iから提示された。

この意見に対して、元高校のベテラン教師Qは、「私も長い間、この『何のために勉強するのか』という問いに対する答えはよく分かりませんでした。最近、古希も過ぎて、『自分を楽しむため』あるいは『人生を楽しむため』というように非常に単純に考えるようになりました。勉強すれば人生が楽しめると思っていれば、道徳的には、『勉強すれば人生が楽しくなりますよ』と勉強することを人に勧めることもできます。以前は、勉強は苦しいものだと思うこともありましたが、今はこういう心境です。学問すなわち科学の研究も、自分を楽しむためにやっているのだと思っています。年をとるにつれて物事がよく見えるようになってきたということではないでしょうか」と述べている。

「勉強するのは自分を楽しむため」という考えを、小学生や中学生が、あるいは高校生でも、完全に理解するのは少し無理かもしれない。しかし、このような哲学的ともいえる話を聞いたときは、その真意が分かるのが分かるまいが、とにかくその内容は記憶しておいて欲しいと思う。何年か経って必ず分かる時が来る。その時の楽しみを思いつつ人生を歩んでいただきたい。自分が生徒の今は、むしろ「勉強は苦しいものだよ」と言われた方が納得できるかもしれない。しかし、その苦しい勉強の先に大きな楽しみが待ち受けているのだということを、道徳的能力を発揮して想像するのも一法である。「楽しむためでなければ勉強のような苦しくてしんどいことは出来ないよ」とか「苦しい勉強も楽しくできるよ」と言えるような心境に、いつかは到達するのではなかろうか。

ところで、著者の一人畑田は、ある陸軍士官から、「勉強するのは世界の平和のため」と言われたことがある。それは、小学校5年生で、戦争の終わる2カ月前、6月梅雨のさなかのことであった。当時、海軍体操という、海軍の兵隊が軍艦の中でする体操を小学生向けにアレンジしたものを、小学生が毎日やっていた。筆者の小学校では、それが非常に上手になったということで、近隣の先生たちを招いて、参観授業が行われた。生徒の体操が終わった後、集会の検閲に来ていた陸軍中尉が壇上に上がり、「君たちは今日非常に上手な体操を見せてくれた。私は大変心強く思った。しかし、君たちは小学校の生徒だ。体操も大事だが、勉強も一生懸命やってくれ。それは戦争が終わったあとの世界の平和のためだ」と言われた。戦争中に陸軍士官が、小学校の校庭でみんなの前で、「戦争が終わったあとの世界の平和のために勉強しろ」などと言うことは、先生たちにとっては思いもよらないことであった。皆びっくりした様子で、わが校の校長先生は、「何ということ言う

兵隊や」とえらく怒っておられた。体操は下手で嫌いだが勉強は好きであった筆者は、「体操もええが、勉強もしっかりやれよ」と兵隊さんが言ってくれたと理解し、単純に喜んでいた。しかし、年とともに、この発言の重要性がだんだんと分かってきた。あの時から半世紀以上を経て、この陸軍中尉の言葉は、間もなく敗戦を迎える日本の小学生に対して、自らの反省も込めて、これからの生き方を教えようとする必死の叫びであったのだ、と思うようになった。彼は、体操を間違えることなくやり終えてほっとしている生徒たちとそれを見ていた先生たちを前にして、体操で鍛えた体で、戦後の新時代を生きていくための、修身に代わる新しい道徳の授業の門を開いてくれたのだ、と今は思っている。事の真意が分かるのに長い年月を要することがよくある。それが分かった時に、皆に知らせる価値のあることだと思えば、出来るだけ速やかにその広報を行うのが、年長者の使命であり責務でもある。この行いは社会における道徳的活動であり、地域・日本・世界の平和に貢献するものであることは間違いないと思っている。

3.3 人は、考えてから行動するのか、行動してから考えるのか

ロータリアンで豊中市民病院総長のR4は、「脳科学の分野では、人間は考えて行動するのではなくて、先ず行動しそれから考えるという説が有力になっている」と述べている。先ず行動、運動があって、そのあとで脳は行動したことを考えるというのである。道徳というものがあって、それにしたがって人間が行動するのではなくて、行動を積み上げていって、その体系のなかで道徳が生まれてきたという考え方である。彼曰く、「私は昭和23年生まれなので、道徳という授業を受けたことはないが、思い出してみると、子ども時代、子ども会で毎日曜日に箒を持って神社へ行き、昼までの間、神社を掃き清めて、終わったら清々しい思いで家に帰り、それから遊びに行くという生活をしてきました。その中での行動の積み上げが、無意識のうちに、私なりの道徳の形成に繋がっていったのだと思っています。そういうことなので、道徳の中身から人の行動が生まれるのではなくて、まず行動を始める、たとえば掃除をする、ゴミ拾いをする、そういう行動を日々積み上げていって、道徳がその人に生まれてくるというふう考えた方がいいと思います。華道や茶道では先ず形を覚え、それに従ってお稽古を続けるうちに、その神髄が分かってくるということだと思います。それは道徳も一緒です。まずは行動するということが重要なのだと思います」。

この「先ず行動し、それから考えて道徳に至る」という説に対して、ロータリアンで精神科の医師R5は、「行動と考えは、同時に進行するもので、行動しながら考え、考えながら行動するというのが、僕の精神科の臨床医としての捉え方です。その上で、道徳教育というのは、それぞれの人が与えられた条件で生き生きしていけるような、家庭教育では親から子、学校教育では生徒たちがお互いに、また、それに先生も加わって分かりあい、さらに社会に出れば、仕事をしながらお互いに人間同士、そういう生き生きとしたものを実現していければいいのだと思っています。ところが、小さいときにもものすごい虐待を受けたり、親父がお酒を飲んで子どもに暴力ふるったりしていると、その子どもの行きつくところは、もう殆どまっしぐらに犯罪ということになってしまいます。その人たちは通常、僕らが望む道徳からはほど遠く、通常の間人教育、道徳的な価値観は全く受け入れられなくなってしまうのです。この人たちに少しでもみんなの持っている道徳に近づいてもらうのは、ものすごく難しいのですが、人間関係に頼るしかありません。そういう大変な体験を持った人が、

学校の先生との関わりによって、少しでも人間的で幸せな感じとか、落ち着いた感じを持つことができ、通常の人間教育や道徳的な価値観に近づいて行けるために学校の道徳教育はあるのだと私自身は考えています。私自身のことを考えても、小さいときのお父さんの息子の私、お母さんの息子の私、小学校で先生に出会った私、あるいは、いじめられた体験を持つ私というように、暴力的な私からものすごく優しい私まで、私自身がピンからキリまでであるのです。学校教育で一番大事なことは、不良とか暴力的な要素を持った人が、先生との人間的な出会い・関わりの中で、幸せで安定して通常の道徳的価値観をしっかりと持つ人間として社会に出ていける教育を、通常の生徒と一緒にやるにはどうすればいいのかを考えることだと思っています。大変難しいことですが、やるしかないのです」と述べている。この話は、道徳を、家庭教育、学校教育から社会・生涯教育への流れの中で捉えて問題の本質に迫ろうとするもので、学校教育における教師と生徒の人間関係の構築に基づく人間教育への問題提起ともいえる。今後、われわれが全力を挙げてその解決に取り組まねばならないことのひとつである。

なお、上記R4氏の「行動と考えはどちらが先か」は、道徳を考える上では大事なことであるとは思いますが、例示されている神社清掃という行動が道徳形成につながったと生徒が思うのは、教員の道徳的配慮が非常に上手であった場合か、あるいは神社の神主さんが生徒の清掃行動中に上手な道徳教育を行われた場合に限られるように、神社清掃の経験者でもある筆者畑田には思える。むしろ、道徳教育の重要性を示している例ではなかろうか。また、同時に述べられている茶道・華道の例は、物事の本質を知るにはまず形から入ろうということであって、「行動と考えることの順番」の話とは少し違うような気がする。

3.4 教育を受ける権利と教育を受けさせる義務—子どもが学校で勉強することの意味を考える

日本国憲法第二十六条には、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。2 すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。」と規定されている。この憲法に規定されている教育を受ける権利は子どもを中心とするものであり、親はその保護する子女に教育を受けさせる義務を負っているのである。すなわち、親は自分たちの子どもを学校に行かせる義務を負っているのである。これは、しかし、言い方を変えれば、親は子どもを学校に行かせさえすれば、少なくとも義務教育の9年間は、その教育は学校に任せて置けばよい、何もしなくてもよい、ということにもなる。ただ、道徳に関しては、学校に正規の教科が無く必ずしも任せきりでよいとは言えなかったが、これも小学校で2018年度から、中学校で2019年度から教科化されることになり、他の教科と同様になった。これによって、一般社会が子どもや若者の道徳教育や道徳学習に無関心となり、地域社会が社会・生涯教育における道徳教育の機能を失ってしまっは大変である。注意を喚起しておきたい、とは弁護士であるロータリー会員R6氏の言であるが、筆者もつくづくそう思う。

豊中ロータリークラブの教育フォーラムには、毎回日本語のわかる外国からの留学生が参加してくれる。その一人Ry君は、昔自分が通ったキリスト教の学校で、やってはいけないことをいろいろと並べ立てられて、嫌気がさしたことがあると言っていた。「こうしましょう」というのではなく「これはしてはいけませんよ」

というのは、通常の学校の道徳教育でも陥りやすいことであるが、楽しく学べる授業にならないのは事実である。学校教育で心すべきことのひとつであろう。

彼は自分の日本語能力は小学生程度と認識している。それで、今日の話合いの内容は理解するのがかなり困難であったという。といっても、この道徳に関する討論を英語でできる日本人出席者は非常に少なく、英語によるフォーラムの実施は不可能である。この日本の一般国民の抱える国際共通言語の問題は、後10年ぐらいで解決しておかないと、日本の存続にかかわるような問題に発展しかねないということを取ってここで指摘しておきたい。

閑話休題、話を道徳教育に戻そう。「道徳を個人、すなわち自分1人の問題として捉えるのと、周りとの関係で捉えるのと二つの考え方がありまして、今日の皆さんは後者、すなわち他人との関係で自分を考えるという捉えの方が多と思います。『アダム・スミス』という本を書かれた堂目卓生先生が、別のご著書『道徳感情論』の中で、『道徳を支えている感情は同感 (Sympathy)、一言でいえば他人を感じる、他人の感じていることを自分も感じることだ』と述べておられます。周りを見て自分を見るというのは、西洋の近代的な哲学の研究者からは、自分の個がない、芯のない説と思われるかもしれませんが、普通の人、一般社会人にとっては、同感できるかどうかを基準にして道徳を考えるとというのは一番素直なのかな、と私は思っています」という発言は、道徳の基準を同感できるかどうかを求める名誉教授J氏の意見である。

この名誉教授J氏はさらに、「それと先ほどの日本国憲法と教育の話に関係して、子どもが学校に行って勉強することの意味について一言述べさせていただきます。極端な話、環境さえ整えば子どもは学校に行かなくても勉強できます、いろんな知識を自分で吸収する力のある子どもなら、放っておいても勉強できるかもしれません。にもかかわらず義務教育で、全員学校に行かせて勉強させるのは、集団の影響・効果を重視しているからだと思います。集団の効果というのは、他人との関係の中で何かを行う時に現れるものです。畑田先生編集の『双方向授業が拓く日本の教育—アクティブ・ラーニングへの期待』にも書かれているように、現在の学校教育は、先生が子ども1人1人に個別に教えるような教え方でなく、子どもの集団に教えているのだということを教師はもう少し強く意識して教育してもらおうとありがたいのです。他人との関係を考えながらアクティブ・ラーニング、すなわち生徒に能動的に学習させるような授業をして欲しいのです。例えば道徳の授業では、子どもたち、家族、周辺の人、生徒から見たら一番はっきり見える他人である先生、その人たちとの関わりの中で道徳を勉強していってくれば良いな、と今思っています」と続けている。

ところが、集団のなかでの教育を受けて家に帰ってくると、カバンを置くやいなや一生懸命走って、今度は個人教育を受けに行く生徒がかなり沢山いる。これについて、J氏は、「皆さん結構裕福になって、そういうことにお金を回せるようになったのだと思います。私の子どもの頃、昭和30年代の話ですが、そういうことは滅多にありませんでした。学校で勉強するだけでした。私は子どもがいないのですが、今住んでいる箕面のあたりでも放課後の塾通いが普通になっていて、子どもが塾に行っていないのは、子どもに親として十分なことをしていないと受け取られかねない環境になっているように思います。学校で先生や他の生徒に質問する機会がなくて分からないままになってしまったことを、家に帰って親に聞いても解決しない。塾の活

動は社会のある種の分業化なのかもしれません」と言う。質問する機会がなくて分からないままになってしまったことを、家に帰って親に聞いても分からないのは、今も昔も同じである。それと、上級学校の受験準備を学校に求めるのは無理な話である。筆者は、前者については、担任の先生が宿直の時に、仲間と一緒に学校に出掛けて行って教えを乞うていた。また、後者の受験準備については、親せきの大学生の支援が受けられて有難かった。

名誉教授J氏は、さらに、塾の機能とその社会との関わりについて次のように続けている。すなわち、「塾には、全部が全部ではありませんが、良い教育をされているところもあると思います。例えば、いろんな意味で、子どもたちの脳を活性化する教育です。ただ、それは、あくまでもいわゆる勉強のための頭の使い方にかかわるものなので、それ以外の頭の使い方を使うべき時間を減らしてしまっているとも言えます。例えば、街を歩き回って何かを見る、人を見る、お店の店員さんのやっていることを見て、この人たちは今何を感じているのかというようなことを経験として感じる時間は、学校教育を受けている時にも大事なのです。先ほど市民病院の総長さんが言われたように、少なくとも道徳には、ある意味では経験の集積のような面がありますので、教科書を使った授業を受けているような生徒にも、このような経験の時間は結構役に立つのです。経験を削って抽象だけを考えさせるようなことはしてはいけないのだと思います。学校で道徳を学ぶのは、生徒と教師の集団の中で他人との関係を考えながら道徳を身に付けることになるのですが、学校が引けてから皆と一緒に地域で遊ぶのは、学校教育の延長、あるいはその新しい展開として重要なのです。この学校教育の社会への展開の機会を下校後の塾の教育が奪うことのないのを祈るのみです。最終的に学校から世の中・社会に出た時には、接触する人の数と種類が圧倒的に増えます。そういうところで、いろいろな人との接触によって経験を深め広げていくのが社会教育、生涯教育の始まりです。私自身は人との接触が足りず、同感の機会を避けてきたようなところがあったのかな、と今自省を込めてこの話をしているのです。70に近い歳になってそういうことを感じているのです」というわけである。

「若い時にはよく分からなかったことの真意が歳とともに次第に明瞭になってくることは、だれしも経験するところである。大事なことは、それを出来るだけ皆の目に留まる形で公表して、人のために役立てることであると思う」とは筆者畑田の提言である。これに対して名誉教授Jは「自己の道徳的な基準や感覚というものは、いろいろな接触による経験が蓄積されて出来上がっていくものです。アダム・スミスの言葉で言うと、『中立の観察者は自分のなかに持つべし』ということになるのですが、周りの人が多分これが社会的に見て中立公平だと思うであろう、という考え方につながるような経験を自分の中に蓄積して、物事を中立公平に見ることのできるもう一人の自分・観察者を自分の中に作り上げていくのです。そういう努力をすれば、それが社会に容易に受け入れられるような、穏やかな基準としての道徳を自分の中に持つことになると思います。何かをやってみたら、えらく怒られたとか、逆に予想以上に喜んでもらえたとか、そういう経験の蓄積が、自分の中での中立の観察者の支援を得て、自らの道徳的レベルを向上させていくのです。また、それによって自分の中での中立の観察者、すなわち、もう一人の自分の道徳レベルも上がるのだと思います」と応え

ている。「自分の中に持つべきもう一人の自分としての中立の観察者」について、読者の皆様が熟慮・熟考していただけることを期待している。

以上、「おぎゃあ」と生まれた後、しばらくの家庭教育を経て、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の学校教育に続いて、一般社会における生涯教育、すなわち、集団における道德教育を、塾の問題も含めて詳細にしかも多様な面から考察してきた。「今は、幼稚園からいわゆる勉強を教えているところもあれば、集団生活の大切さを教えるのに重点を置いているところもある。さらに言えば、かけっこで1等、2等を決めるのはいけない、全部一緒に、というような意見もあるという。同様な問題は小学校以上にもあるかもしれない。細かいカリキュラムは兎に角、教育の根本原理にかかわる方針には一貫性が必要である。今の日本の教育には、これが欠けているのではないかと、今、強く思うに至った」とは、ここまでの話し合いを総括的に振り返ってみたロータリーパストガバナーがハタと気づいたことであるという。

幼稚園や保育園のかけっこで、「1等、2等を決めてはいけない」という意見がでた時に、何の議論もせず、「では順位付けを止めましょう」というのはあまりに安易な解決策であるが、と言って、この問題を幼稚園児と先生と一緒に話しかけるのは少し難しいとは思ふ。しかしながら、幼稚園に限らず、教育の世界に順位づけはつきものである。学習成果の評価なしには学校教育は成り立ち難い。このような問題を、生徒自身とその周囲の人たちへの影響や効果を考慮しつつ話しかけることは、小学校上級あたりからの道德教育における格好の題材であろう。そして、そのような時に、学校など話しかけにかかわる組織存立の根本原理や教育活動の根本原理が明らかでないと言語が進めにくいことは間違いない。運動選手が他の選手の飲み物に薬を入れるが如きは、教育の世界のちょっとした隙間を突いて出てきた非道德的行為であろうが、存立の根本原理の明確であることが如何に大事かを示す好例ではある。

第4章 最近相次いで起こった大学・会社における非道德的行いについて

ここまで来て気がついたのは、大学というところは、自己にかかわるいろいろなものの存立の根本原理をあまり考えずに、ひたすら教育・研究に専念している、あるいは専念しているつもりになっている教育機関ではないかということである。

4.1 大学における論文ねつ造と小・中学校における道德教育

最近、さる国立大学からねつ造論文が出版されたような話は、大学の存立の根本原理が理解できているものには、到底行い得ない非道德的行為である。高校生A君は、「その話を聞いたとき吃驚しました。世界的にすごく有名な先生方が出版された論文がねつ造であったということです。自分がそんな行動をすることで、自分の周辺の関係者にどういふ影響を与えるかということを中心にちゃんと考えていないのだな、と思いました。道德的観念がすごく欠落しているとしか考えようがありません」と言った。著名な大学の先生が高校生に諫められている格好である。特定の助教が1人でやったのならともかく、多くの立派な先生方が名前を連ねている論文である。ねつ造をどうして論文の発表前に見つけることができなかつたのか。いくら人数の多い研

究グループの中での出来事であったとしても、一体どういう論文の作り方をしているのかと訝しく思う。改めて猛省を促しておきたい。

国の最高学府ともいわれる大学の助教、すなわち教官が、高校生にも容易に非道徳的と理解できることを行うのは、その責任は大学にあるとしても、その原因を小学校や中学校の道徳教育に求めるのは無駄なことではないと思う。これに対して、豊中市教育委員会事務局係長の一人 R は、「学校の道徳教育は、小学校が本年（2018）から、中学校が来年（2019）から正式な教科としてスタートをいたします。今までも道徳の授業はずっとやっていたのですが、いじめの問題など、クリアできない問題が山積し、道徳という教科をしっかり格付けして行っていないといけないという流れの中で、道徳の授業の正式な教科化が行われたと思います。この新しい道徳の教科の1つのポイントは、これからの社会が今までにないほど激しく変化し、未知のことが沢山出てくることが予想される中で、今の子どもたちは、とにかく考えて生きていかないとはいけなく、子どもたちが自分たちで考えて議論しながら、激変する社会に対応出来る主体性を学んでいくことだと言われています。これを現場で具体的にどういうふうに進めていこうかというところで、日々、悩んでいます」と応えている。

新しい道徳学習の具体的方策については今後も試行錯誤が繰り返されるとは思うが、この教育委員会担当者の示すような心意気で義務教育の道徳教育が行われている限り、大学に来て論文ねつ造というような非道徳的行為に走るようなことにはならない筈である。若しそんなことが起ったとすれば、その原因は大学を含む一般社会に求めるのがよさそうである。すぐに気がつくのは、本来は静かでゆったりとした環境の中で研究が行われている筈の大学で、何年何月までに論文をいくつ出せとか、世界の何とかいう有名な学術誌に論文が掲載されるようにしろとか、それができれば研究費をいくら与えると言って研究者の尻を叩くような雰囲気・荒波が大学に押し寄せていることである。そして、そういう状況に国民が加勢しているとはまでは言わないが、少なくとも黙って見ている人が多いのも事実である。国民は「教育と研究」という大学存立の根本原理をもう少しよく理解して欲しいと思う。

4.2 大学・企業における非道徳的事件とその防止対策

大阪大学理学部の S 教授は、「大学での論文ねつ造のような非道徳な出来事には、いろいろな背景があると思います。先日東大で起こったのは、確か、先生が『こういう結果が出るはずだ』と学生に指示し、学生が実験してみるとその通りにはならなかったが、学生はそれを先生に正直に言えず、ねつ造してしまった、ということだったと思います。私は理学部なので、研究の原動力は好奇心です。『何故こうなるのかを知りたい』というのが動機なので、論文ねつ造など絶対に起こらないのです。ただ、科学の研究にはお金のいることが多いのです。そのお金をもらうためには業績が上がっていないといけない。それで、つい悪魔の誘いに乗ってしまうというわけです。企業、例えば食品会社が何かの値を偽装したというのも似たような話です。また、公表したら会社のためにならないようなことは隠しておくというのもあります。実は、私の娘が去年食品系の会社に就職したのですが、そのときに一寸言ったのです。『もしもその会社に偽装があったらどうするの?』と。この種の問題は、最近、食品会社だけではなく、素材メーカーでも起こっています。今、道徳の問題を徹底的に

議論しているのですが、会社のためにはなるが、社会のためにはならない、ということはよくあるのです。ある一部の人のために正しいと思ってやっていることが、もっと大きい社会に対しては不正、非道徳になるということがあって、その辺の判断を適正・適切にすることが、これからの企業にとって必要になってくると思います。そのための教育はかなり難しいことで、自分で考えないと仕方がないという面が強いのではないでしょうか。日本社会のあちこちにこういう問題があって、問題解決には個々の人たちがどういう態度をとるべきかを真面目に考える以外に方法はあります。最後に、先ほどの、論文ねつ造などの大学での不正・非道徳行為への対策ですが、私どもの大学院理学研究科では、入学した学生さん約300人全員に、入学した次の日1日を使って集中講義で『研究者倫理特論』を受けさせています。いろいろな具体例を挙げて、何故そういう状況に陥ったのか、もし自分がそういう状況に陥ったときには、どうすべきなのかをみんな考えています」と詳細にこの問題点を解説した。

この理学部教授の発言の中で、「会社のためにはなるが、社会のためにはならないことがある」というのは重要な指摘である。言い換えると、社内では道徳的に行いと言っても、大局的に見れば非道徳であることがよくあるので、企業の人たちは、このような過ちを犯さないようにしてほしいという願いである。会社員は同時に社会人でもある。会社のために仕事をしているときも、社会人としての眼は常に開いておいてほしいという教授の願いでもある。彼はこの願いを、「問題解決には個々の人たちがどういう態度をとるべきかを真面目に考える以外に方法はあります」という言葉に込めているのである。企業の活動にあまり厳しい道徳的制限をかけると、非常に仕事し難くなるという指摘もある。慎重に考えねばならない問題かもしれない。ロータリーの四つのテストは、このような職場にかかわる問題解決を目標として作られたものである。大いに活用していただきたいと思う。この職業奉仕活動の優れた規範であるロータリーの四つのテストについては、第6章であらためて議論することにする。

4.3 非道徳的事件とサイコパシー

それにしても、これほど単純な犯罪行為が起こるのを大きな国立大学で防げなかったというのは、かなり理解し難い。非正規職員に期限を切って成果を要求したというようなことはなかったか、また少数の責任者では制御しにくいような大量の研究員を擁する組織の運営・管理システムに問題はなかったのであろうか。まだ他にも問題があるかもしれない。この問いかけに対して、最近の大学における不祥事・非道徳的事件にサイコパシー（Psychopathy：精神病質）の人がかかわっていないだろうかという指摘が、名誉教授Ⅱによってなされた。サイコパシーと言われる人は、本当に普通にみえる優秀な人である。ただ、嘘をつくとか他人を欺くとかというようなことを、何の罪悪感もなしに平然と行うことができる。したがって、このような人が大人数の研究グループに紛れ込み、一人で論文を仕上げると、ねつ造論文が同僚に見抜かれることもなしに、公表されてしまうというようなことが起こりかねない。これまでに起こった論文不正がサイコパシーに関係しているという証拠はないが、心すべきことであろう。サイコパシーは、小学校上級ぐらいから顕在化してくるという。これをどのように把握し、どのように対処するべきかは、教育委員会を中心に教育界全体で真剣に考えていかねばならない問題である。サイコパシーの特徴は、共感能力と罪悪感の欠如であるという（ジェームス・ファロン

著、影山任佐訳『サイコパス・インサイド—ある神経科学者の脳の謎への旅』、2015年1月金剛出版)。3.4節(11頁)に記載されている「道徳を支えている感情は同感(Sympathy)、一言でいえば他人を感じる、他人の感じていることを自分も感じることである」という堂目卓生先生の言葉を思えば、道徳教育の中にサイコパシー問題解決のカギが隠れているのかもしれない。

4.4 非道徳的不祥事への道徳教育的対処

したがって、大学におけるいろいろな不祥事、非道徳的な問題の解決は、至極常識的な結論ではあるが、サイコパシーにかかわる難問も含めて道徳教育的対処に委ねるということになる。ここで、その大学が国公立か私立かにかかわらず、大学と教育委員会との緊密な連携・協力と意見交換の必要性が浮かび上がってくる。まずは、豊中市教育委員会事務局係長Rの大学観を聞いてみた。「今、ここでは、大学における非道徳的行為が問題視されていますが、政治の世界にもいろいろな意味の非道徳性が存在するように思います。若者に道徳の手本としては示しようもないようなことが行われているとも聞きます。また、大きな地震の時には何が起るかわからないような構造の建物が、あちこちに建てられているという話もあります。政治や経済の世界における道徳の問題です。このような状況を放置すれば、日本の政治も経済も科学も技術も破綻を来してしまうのは目に見えています。畑田先生が大学の一部の人たちの非道徳的な行いを強く責めておられる気持ちはよくわかります。私も、大学で学問に専念している人たちはよき道徳家であって欲しいのです。しかし、そうあるべきだと言えだけの自信がないのです。いま日本が直面するこの難問をどのように解決し、どのような形で次の世代を担う子どもたちに伝え引き継いでいくのかを考えるのに、四苦八苦しているのが今の私です」というのが彼の意見である。

これだけのことを言ってくれる教育委員会の職員がいることを非常に心強く思うとともに、大学教授をはじめとする大学関係者は、彼の言に、そして彼の期待に応えねばならぬまい。その覚悟をした上で、まず言わねばならないことは、今日のフォーラムの前半で何度も話が出ているように、「社会で仕事をするすべての人間は道徳をわきまえていなければならない」ということである。したがって、科学者も当然道徳を身につけていなければならないのである。学問と道徳は関係ないと言うような教授が若しいたら、その人は教授としては存在し得ないことになる。学問をする人の道徳は、学問をすればするほど磨かれ、レベルが向上していくものであることを認識しておいて欲しい。あらゆる分野の学問を進める根本の力は創造力のもととなる想像力であり、そして想像力は、第2章の終わり(5頁)で述べたように、道徳的能力の根幹の力でもあることをここであらためて強調しておきたい。学問をすればするほどその人の想像力は磨かれ、したがって道徳的能力は向上するのである。また、これも先に一言述べたことではあるが、道徳の基準は分野によって若干異なるし、実業の世界では、日常の実務に対する道徳的制限に少しの寛容度が認められてもよい、そうでないと実務が非常にやり難くなるという意見もある。しかしこの考えは、個人の厳しい規制に基づく制御なしには成り立たないことを国民は知っておくべきである。また、サイコパシーの問題は、教育委員会としても慎重かつ確実に効果のある対処をしなければならない問題である。これに直接関係のある教員だけでは

なく、全教員が集まって徹底的な議論をした上で、外部の人も交えた、例えば今日のような会合でさらなる議論を深めていくのが良いのではないかと考えている。いずれ時を改めて議論の場を作りたいと思う。

4.5 学校における道徳教育はいかにあるべきか

大学に限らず、どこかの組織・団体が不祥事、非道徳的事件を起こしたときに、そこに反省を求めるのは当然のことである。しかし、それだけでは組織の長と問題を起こした組織の部署だけが不祥事の意味を自覚するだけで、組織全体にはことの重大さが伝わらないことが多い。それで、しばらくすると、また同じような非道徳的事件が、別の大学や研究所で起こるといようなことになってしまう。大事なことは、国民が事の次第と真実を十分に認識し、自分たち国民の持っている力を、社会を良くするのに役立てることである。大学を、そして社会をよい方向に変える原動力は国民以外にはないことを日本国民はもっと自覚し、そのための学習をして欲しいと、今つくづく思う。一番変わらなければならないのは、対岸の火事の様な顔をして澄ましているように見えなくもない日本国民ではなかろうか。

筆者の発言を受ける形で、高校教育に豊富な経験を持つベテラン教師Qは、「そういう意味では、前々から言っていますように、家庭教育を含めて、教育現場で、『相手がして欲しいと思っていることをする、他人の嫌がること、他人に迷惑をかけるようなことはしない』という道徳の基本・根本にかかわる学習を、通り一遍ではなく、もっとしつこく行わせることが、今、一番大事であることを強調しておきたいのです。そういう教育をきっちりしていけば、直ぐに全てが変わることはないにしても、状況は少しずつ好転していくと思います。その上で、先ほど話の出た政治・経済・科学・技術の現状や背景をよく勉強して、今どういうところに問題があって、何を改めないといけないのかを明らかにし、出来れば、その対応策も一緒に次の世代に引き継いでいくようにすることが、我々の役目かと思います。大阪大学理学研究科の大学院入学者に対する集中講義『研究者倫理特論』は素晴らしい解決策です。このような道徳教育の展開は、そんなに難しいことではないと思います」と道徳の授業の根本原理を語った。

また、大企業での長い勤務経験を持つ男性Wは、「小学校以下の学校教育での道徳教育は、わかりやすく基本的な内容を教えるのが最も良いと思います。このような教育としては、道徳的行為を実際に実行した過去の偉人伝などを子どもが興味をもてるように読み聞かせることなどが考えられます。遠い過去の道徳的な偉人の話は、長い歴史を経ても、なお、語り継がれており、比較的、時代や社会により評価が変わりにくく信憑性が高いと考えられるからです。私が子どもの頃に教わったのは、二宮尊徳、野口英世やヘレンケラー、ガリレオガリレイ、ソクラテスなどの話だったように記憶しています。現在であれば、杉原千畝（すぎはらちうね、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%89%E5%8E%9F%E5%8D%83%E7%95%9D>）などがこれに加わるかもしれないし、大戦中なら乃木希典を筆頭にあげたかもしれません」と述べた。

これを聞いた高校生A君は、道徳の授業には絵空事やきれいごとの話が多く、高校生ぐらいになると若干斜に構える者も出てくる。もっと現実の社会で実際に起こったことを教材にして討論出来る授業をして欲しいと、次のように述べた。すなわち、「私は今までに、小学校で6年間、中学校で3年間、道徳の授業を受けたのですが、小学校の道徳の授業は生徒の生活に密接に関わりがないことが多かったと思います。例えば、

童話に出てくる登場人物の話など、絵に描いたような話が多いのです。そんな話は小学校低学年の間は素直に受け入れられるのですが、4年、5年になってくると、こんな話は実際にはないだろう、結局、この授業は一体何のためにやっているのか、先生もそれが分かっていないのではなかろうか、という考えが頭をもたげてきました。こんなことは、これまでの学校生活では道徳の授業だけです。例えば、今日のフォーラムのように、将来、社会に出た時に関わるかもしれないこと、あるいは社会で実際に起こったことについて、良いことだけではなく、非道徳的な事件も含めて討論し考える場を授業の中に設けていただければ、有難いのです。そうすれば、実社会で起こるいろいろなことを見る目が肥えてきて、判断力も養われ、将来、社会に出た時に、少なくとも、詐欺のような非道徳的で反社会的なことを起こさないとします。学校の授業では、社会に出てからやってはいけないことも教材にするというのには反対意見があるかもしれませんが、授業で議論した非道徳的で反社会的なことを、社会に出たら是非やってみようというような人は滅多にないと私は思います」ということである。高校生A君は、さらに筆者畑田の質問に答える形で、「私の提案は、社会や歴史の授業ではなく、道徳の授業の中で実現して欲しい。なぜかというと、私が望んでいるのはタイムリーに起こっている事件を教材とする授業だからです。歴史や社会では過去のことを扱うことになりかねないと思います。社会、国語、数学などの教科で鍛えた論理的思考力を活用して授業中の討論を活性化できれば最高だと思います」と述べている。彼の一連の発言は、どんな授業でも考えることを忘れずに授業を受けた生徒は、社会に出てから授業の内容を何かの形で役立てることができる、あらゆる教科で何故？を考え議論するのが道徳につながることを意味しているように思える。先に述べた、「道徳教育の根本は想像力の養成である」という言葉を生徒の側から言い直したとも受け取れよう。そういう意味では、社会、国語、数学だけではなく芸術、音楽等にかかわる教科も道徳と深く関係することになり、文科省のいう「道徳の授業を司令塔として、他の全ての科目で道徳を教育し学習させる」という趣旨を実践することになる。

4.6 心の教育を考える

「何故？の重要性を認識していない教師は殆どいない。ところが、そういう学習の必要性を深く意識している教師は意外に少ない。もう少し、授業中に何故？を意識して解説するような方法を取られたら良いのではないだろうか」と指摘するのは、西宮高校のベテラン教師Pである。

同校のもう一人の教師Tは、恩師から、「教師たるものは生徒に背中を見せて、生徒はそれを感じて行動するようにならないと、本当の教師にはなれない」と言われたという。そして、何故？を意識して解説するような方法として、生徒に自分の背中を見せて教育する、言い方を変えれば、自分の行動を生徒に見せて無言の教育をすることを提唱する。そうは言いながら、そういうことの出来る教師が減ってきたと嘆く。今は、頼まれて、地元のもめ事に頭を突っ込んで一所懸命考えるというようなこともない。その理由は、子どもの頃に、近所の子どもたちと公園で一緒に遊んで、お兄ちゃんやお姉ちゃんのいろいろな振る舞いからいろいろなことを学び取るというような経験をしていないため、そのような力が殆どつかなかったのだろうと推測する。彼の言わんとしているのは、一言でいえば、心の教育である。「日本社会の高度成長の中で切り捨てられていったものが結構あります。勿論、今まで知らなかったことが得られて成長した部分もあるのですが、

大事なものが無くなってきています。品物ではなくて、心の中で『まあ、いいだろう』みたいな風にして切り捨てられるのです。お金が切れたら稼がざるを得ないですが、心の中で切り捨てられた場合は、『形にならないからいいだろう』みたいなところが、あるのかもしれませんが」ということである。

このような状況を、最近の一般的風潮と看過するわけにはいかない。元高校のベテラン教師Qは、「人間関係が、親御さんも含めて、環境的に制限されるようになっていきます。どう考えても、人と人との関わり合いを持つ機会が環境面で変わってしまっているのだと思います。先生を中心とする環境も同様に変化しています。そのような先生が教えた生徒には、影響がさらに強く伝わっていきます。世の中の変化だから仕方がない、というわけには行きません。好ましくない状況です。教育の世界から感動が消えつつあるのです」と述べている。「教育の世界から感動が消えつつある」というのは聞き捨てできない事態で、放置すれば、道徳教育・学習の消滅につながることは明らかである。彼はさらに、「組織の中で本来起こってはいけないような最悪の事態が生じたときは、ただ謝るだけではなく、事態をよく整理して社会に公表し、二度とそのような事態を引き起こさないための段階に進んで欲しい。今度の阪大、京大、東大の問題も、阪大、京大、東大だけでなく日本全体がこのような問題に直面していると考えerべきです。社会に出た時どう振る舞うかという能力を身に付けさせる息の長い努力が必要で、その努力は学校・大学だけでなく、地域社会、家庭にも強く求められるものです。また、問題解決には、政治面からの配慮も不可欠です」と述べている。学校、大学、地域社会、さらに政治面からの息の長い国民的配慮を強く求めている発言である。政治の問題を学校教育で扱うことには難色を示す人もあろうかと思うが、特定の意見に偏らない適切な配慮を担当教員が行うことができれば、道徳の授業でも社会の授業でも、何ら問題は無いと筆者畑田は考えている。

ここに述べた道徳の授業における心の教育の問題、例えば、「教師たるものは生徒に背中を見せて、生徒はそれを感じて行動するようにならないと、本当の教師にはなれない」という言葉は、教師にかなり高レベルの教育能力を求めるものである。「学校の先生は教科を教えるのが、先ず、第一です。それを超えて、高レベルの心の教育のようなことを全教師に求めるのは、避けた方が良いと思います。先生個人には、それぞれ特有の資質・能力があります。それを引き出し、伸ばすのは良いが、それを超えることを無理に押し付けるのは避けるべきです。道徳教育の中の心の教育などは、組織の中のシステムの問題として取り組んで欲しいと思います。教育委員会は、先生方のこのような問題解決を支援するために設けられたものです」という名誉教授Hの意見には、耳を傾けて置いて欲しいと思う。

また、この名誉教授Hは「日本人の精神性にはあるがまま、すなわち、そうあらしめている何かへの畏敬の念があるのです。例えば、初詣にいくとか、盆踊りをやるとか、秋になると十五夜をめるとか、そういったことが日本の風物詩として残っていて、その中に、何かへの畏敬の念にかかわる文化を持っているのです。この寛容性と弾力性に富む日本人の精神文化を、論理性を命とする自然科学や規則を旨とする法律と完全に適合させることは非常に困難です。言語一つをとっても、日本文化の「有難う」と自然科学や法の世界の「有難う」は意味が違うのです。今日ここにお越しの方々、日本文化のこのような特徴についても注意を払っていただきたい」とも語っている。事の内容はかなり難しいものかもしれないが、非常に重要な指摘である

ことは間違いない。筆者自身は、自然科学の論理に寛容性や弾力性が存在しても可笑しくはないし、法による裁きも人の心を見殺した冷徹なものばかりではないと思う。道徳の授業での論題としても興味深いものであると思いつつ、この話を聞かせていただいた。いずれにしても、この二つの指摘は、小・中学校からの教育にかかわる問題であり、若し何かの対策を講じたとしても、その効果が現れるのに5年、10年と長い時間のかかる仕事であることをあらためて強調しておきたい。

第5章 生徒たちはどのような授業を望んでいるのか

第4章で、「道徳の授業には絵空事やきれいごとの話が多く、高校生ぐらいになると若干斜に構える者も出てくる。もっと現実の社会で実際に起こったことを教材にして討論出来る授業をして欲しい」と訴えた高校生A君は、ここでもあらためて、「道徳の授業の教材に、もう少し論理的なものの考え方を磨くのに役立つような記事やラジオニュースが欲しい」と述べた上で、「以前に地歴の先生が、朝の新聞で実生活に繋がっていて面白いと思った記事をスクラップしてA4用紙にまとめたものを全生徒に配り、それについて先生や周りの生徒たちと意見を交わしたり質問したりする時間があって、それが、道徳以外の授業でも道徳の根本、道徳の心を学習できるという印象を僕の中に強く残しています。例えば、道徳の学習に必要な論理的思考能力は、算数や数学の授業で学ぶことができます。一つの事を違う言葉で捉え直すという能力を学習したいのなら、英語あるいは外国語と国語の授業だと思います。どの教科にも、道徳的というか人間として大切な部分にかかわるところがあって、それを学び取って道徳の場で生かすのが理想だと思います。ここで物事の本質が見抜けるようになれば、もっと理想的です。次いで学習の成果を実社会の場で実施するときに、論理性や対話能力が必要になるのです」と考えの詳細を述べている。

高校生A君のこの言葉は、文科省の道徳教科化の趣旨に対する、生徒の立場からの理想的表現ということが出来よう。さらに少しつけ加えれば、特定の言葉で表現されていることを別の言葉で捉え直す能力の学習は、単なる言語能力の向上だけではなく、その言語の持つ文化力の向上につながるものであり、国際的な場における道徳的能力の向上に大いに役立つものである。彼は、言語の持つ文化力の学習を日本の社会に強く求めているのだと思う。そして、ここに述べた道徳にかかわる種々の能力は、第2章5頁に述べた道徳的能力に包括されているものであり、その根幹の力は想像力であることをここでも強調しておきたいと思う（畑田耕一、道徳的能力と想像力 www.culture-h.jp/tohroku-osaka/dohtoku-sohzoh.pdf 参照）。

この生徒の発言に対して、内科医でロータリアンの一人R7は、生徒に教える立場から、次のように述べている。「地球上にはいろいろな国があり、政治情勢も違うわけです。社会主義の国と自由主義の国とでは憲法そのものが違います。社会主義の国では、政府に反対する人が多数いる場合は、不道徳・道徳律違反という形で罰せられることがあるでしょう。自由主義陣営の中では、少数の異を唱える人が非道徳的という判断をされることがあるかもしれません。こんな風に、時代によって、また現代であっても、国によって、人種によって、同じ国のなかでも老若男女によって、適用される道徳の水準・基準が違うわけです。ということで、人々が安定した暮らしをしていきたいのであれば、悪いと判断されるようなことをしなければいいのです。

その国が定めた憲法あるいは教育に沿ってやっていけば、争いごとは起こりません。だけど、必ずしもそうはならないので、世界中で戦争が起こっているわけです。それでは本当の道德とはどういうものかと考えると、人種や年代に左右されない、いわゆる人間性を持った最高の処世術、あるいは処世を導くような基準、そういうものが本当の道德であると思います。ただ、このような本当の道德が存在し得ても、国の政治体制には依存するし、一人の人間が活着している間でも、小さいときから死ぬまでの間に、その国の道德水準が変わる可能性はかなり大きいです。一つの国の中でも一つに決めるのは難しいのです。学校における道德教育も、国の方針が定まっていればそれに沿った方法でやる、自由にやる、あるいはロータリーの4つのテストに沿ったようなやり方でやるなど、いろいろな選択肢があります。学校の道德教育は、長い人生における道德教育、道德学習のなかの一つの段階なのです。そこでどんなふうに教えるべきか、あるいは学ばせるべきかは、学校によっても違うでしょうし、国によっても違うでしょう。難しいと思うのはそういうところです」

このように道德に関する勉強は、生まれてから死に至るまでの長い期間、人が真っ当に生きていくために課せられた重要な使命である。保育園・幼稚園や学校での道德教育では、教えるものと学ぶ者の立場が明瞭であるが、それ以外の家庭や一般社会では、誰が教えて誰が学ぶというような、それぞれの立場はあまり明確になっていないので、道德の学習を中心とする勉強の必要性を皆がよく認識していることが重要なのである。道德の勉強は、学校の道德の授業だけではなく他の全ての授業で、さらに、学校以外の全ての場所、時間で、すなわち特定の場所、時間だけではなくて、何処でも何時でもやることができるし、またやらねばならないことなのである。そして、道德の内容は、場所と時間（時点）に依存して変わることがあり、政治の影響を強く受けることもあることを忘れてはならない。事の善し悪しは別にして、筆者畑田にも、教育勅語が道德の基本であった期間が小学校で4年を超えている。

外国人が日本に来て「素晴らしい」と思う理由の一つが、非道德的な行いの非常に少ない国だということである。日本人は、やさしく礼儀正しいし、落としものをしてすぐ届けてくれるという。その理由の一つは、家庭や学校での道德教育が、適切に行われているためであると思われる。家庭教育は学校教育に依存し、学校教育は家庭教育に依存する。このような素晴らしい日本を守り続ける努力を国民は忘れてはならない、という意味のことが数名のロータリアンにより力説されていた（R8 および R9）。

第6章 ロータリーの奉仕の道德が集約されている四つのテストを奉仕の心として広報したい

第2章の冒頭（3頁）で、人間は一人では生きていけない。自分を囲むすべてのものと向き合って、どういふふうに生きていくかを考えるのに道德が要ることを述べた。これは、自分を囲むすべてのものといかに付き合うかを決めるのに必要な規則が道德である、という考えである。自らの道德的規範を自らの道德的能力だけで決めるのが困難であったり、「これでよいのかな」と不安になったりすることがある。ここで必要なのは、事を行うに当たって参照すべき判断の基準のうち、法律のように既に決まっている外部基準ではなく、個人が自分の中に持っている内部基準、すなわち、先に12頁で名誉教授J氏も指摘している、自分の中のもう一

人の自分とも言える人間が示す判断基準である。このような場合に上手な手助けをしてくれるのが、以下に示す「ロータリーの四つのテスト (The four-way test of Rotary)」である。四つのテストの活用は、同様の問題に対する判断基準が各個人によって異なるという不都合も防いでくれる。

この四つのテストには、人間が社会で生きていく上での善悪の判断基準が、ロータリアンのみならず一般の人々にも理解できるような形で、簡潔かつ的確にまとめられていると思う。

<四つのテスト>	<The Four-Way Test>
言行は以下のことに照らしてから行うべし	Of the things we think, say or do
1. 真実かどうか	Is it the TRUTH ?
2. みんなに公平か	Is it FAIR to all concerned ?
3. 好意と友情を深めるか	Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP ?
4. みんなのためになるかどうか	Will it be BENEFICIAL to all concerned ?

まず、「真実かどうか」は「嘘偽りがないかどうか」というような単純な解釈はせずに、もう少し深く考えて、「物事の原理・原則、根本原理に合っているかどうか」と理解するのがよいと思う。

「みんなに公平か」は、私的感情をあまりまじえずに、偏り無く対処している、いわば、太陽のような存在か、という意味なので、「みんなに公正か」という方が良いのかもしれない。真実は時として信念の要素を含むことがある。それが相手を困らせることが無いような配慮も要するということを、言外ににじませているとも言える。

「好意と友情を深めるか」は、自分以外の人や動植物やものと付き合うときの、ごく自然で基本的な対処の仕方であるが、ここでは、ある程度の私的な感情が混ざるのはやむを得ない。大事なことは、それが他を排除するものであってはならないということである。

道徳的な基準は、自分が何かを行うときの他への態度の規範であるが、それは当然、相手もそれに反応しやすく、何かを行いやすいための配慮を含んでいなければならない。これが、「みんなのためになるかどうか」として考えられる。「好意と友情を深めるか」の判断で、私的な感情が強くなり過ぎないように戒めているという解釈もできる。

四つのテストの基本は「真実かどうか」であるが、それが自己の信念のかたくなで偏狭な押し付けにならないように、短い言葉を組み合わせ、互いに相補わせることによって、実に上手に、道徳的規範という、考え様によっては堅苦しいことが、やさしく穏やかに述べられている。四つのテストのそれぞれを個別のものとは考えずに、全体を一つに融合したものと捉えて、自分の言行を判断することが重要である。

ある中学校の3年生100余名に、「教育とロータリーの四つのテスト」という主題で道徳の話をしたところ、普段の道徳の授業とは様子の違う話に、ある種の驚きと戸惑いを示しつつも、熱心に聴いてくれた。その時の生徒の感想・意見を読むと、20%近い生徒が「四つのテストは善悪の基準として納得のいくものである」という意味の反応を示していた。「道徳とは何か」という話は、考え方の根本的なことで、とても参考に

なりました。特に、四つのテストは善悪を判断する基準として、とても分かりやすく、日常生活にあてはめて考えることができます。『何のためにこれをやるのか』という答えを出すことができます」という意見からは、このテストが中学生にも訴える力を持っていることが分かる（畑田耕一、「教育とロータリーの四つのテスト」<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/E3.html> 参照）。



テーラー夫妻が来日の際、岐阜 RC が岐阜公園に建てた四つのテストの碑を訪問

<https://rotary-no-tomo.jp/documents/memory.php>

四つのテストは、アメリカ合衆国シカゴのロータリアンのハーバート・J・テーラーが1932年の世界大恐慌の時に考えて作り、ロータリーの中で使われてきたものである。しかし、その内容は、上で述べたように、一般社会人が関わっても何の問題もないもののように思われる。そうであれば、この四つのテストを一般社会に公開・広報して、多くの人たちの日常生活に活用してもらうことが、地域社会のため、さらには日本のためになると思うが、如何なものであろうか。

この問いかけに対して、豊中市教育委員会事務局学校教育課の教務係主査U氏は、「四つのテストの内容は、人間の生きざまの基本にかかわるものであり、人類共通で世界のどこの国でも通用するものを含んでいるので、何らかの形で社会に広げたらいいと思います。中味を読めば普通の人が考えていることですし、いろんな意味で中立性が保たれているので、道徳的判断基準として使えると思います。広報に当たってはロータリーをあまり前面に出さない方がよいかもしれませんが」と述べ、四つのテストの社会への広報に賛意

を表している。また、大阪大学大学院理学研究科の元研究科長の教授Vも、「四つのテストはよくできていて万人が理解できる良い内容だと思います。私も、判断に迷い悩んだ時にはよく使うので、社会への広報には賛成です」と述べている。前頁の写真は、四つのテストの生みの親ハーバート J. テーラー氏夫妻が、岐阜ロータリークラブが岐阜公園に建てた四つのテストの碑を訪問された時のものである。

一方、豊中ロータリークラブ会員の医師の一人 R3 は、四つのテストの一般社会への広報にかかわる問題点をいろいろな観点から分析し、次のように述べている。「四つのテストは、私自身は非常によくできていると思いますが、①これはアメリカでつくられたものです。その西洋的な考え方を四つのテストの日本語が正確に伝えているかという疑問があります。②それから、道徳の授業は遅くとも小学校から始めるわけですが、四つのテストは私どもが読むとなるほどと思う内容ですが、これをそのまま、これが真実かとか、これが公正かと言っても、子どもには理解できないと思うのです。③また、これは非常に大事なことなのですが、truthとか fair という語が英語ではどういう意味なのか、その日本語の『真実』と『公平』という語は適切なのかという問題です。したがって、四つのテストを小学校や中学校で教えるのはリスクが大きすぎます」ということである。①、②、③は、すべてもっともな意見である。①は殆ど全ての翻訳に付きまとう問題であるが、四つのテストの場合には、22 頁から 23 頁にかけて記したこと以外はあまり大きな問題はないと思っている。それと、四つのテストは短い文章なので、本稿でもそうであるが、英文と日本語を併記することが多く、この問題の解消に役立っているように思う。ただ、ここに関連する事項として、日本語では、英語の to all concerned が省略されていることは一度きっちりと議論しておくべきであろう。②と③の一部は、小学校や中学校で四つのテストを中心に据えて道徳の話をするを前提とした意見であるが、そのようなことをするロータリアンは、筆者自身も含めて誰もいないと思うので、特別な配慮は不要であろう。ただ、四つのテストの本質が理解できるのは、授業の後の感想文を見る限りでは、小学校 4 年生ぐらいからである。③に述べられている言語の意味の問題は、筆者も真実と公平とについて既に議論したところであるが、英語の単語を 2-3 語の短い日本語の単語に変えることは可能なのか、死ぬまで勉強を続ける以外に解決の道はないと言わざるを得ない。

この医師 R3 の発言のうち、筆者が一番大事なことであると思うのは、四つのテストはアメリカでつくられたものである、という事実である。さらに言えば、ロータリーはアメリカでつくられたものである。ロータリーは英語圏の文化であるともいえる。そのロータリー活動を、英語ではなくて日本語で行うにはどのような配慮が必要なのであろうか。「ロータリー精神が日本人に完全に理解され得るのか」という問題とともに、深く考えておくべきであろう。「四つのテストについて議論するのなら英語の原文について行うのが本来の姿である。日本語版は日本語訳の一つの可能な形であることは理解しておいてほしい」というロータリーパストガバナーの言を常に頭に思いうかべていなければならない。同様の問題は、日本の産業文化の分野にも存在するように思う。別の機会に長い時間をかけて討論したいテーマの一つである。

四つのテストの広報の章の最後は、元豊中市市民病院の医師で現在は大学教授のロータリアン R10 の、「何があっても勉強！」という国民に対する励ましの言葉で締めくくりたい。「私自身は市民病院を退職して以来、

新しい仕事をするたびに新しい勉強をしています。資格を取るための勉強をすることもあります。これらは全て、それまでの自分にはなかった新しい道徳を身に付けているということになります。皆さん一所懸命勉強しましょう。四つのテストを使って正確な道徳的判断ができるようになるのに、何が一番大事かという、勉強なのです。経験に基づく勉強ともいえます。私のような歳になってもまだ勉強なのです。道徳は常に勉強を求めているのです。生まれてから死ぬまでが勉強、死ぬ間際になってやっといろいろな勉強ができたなと思うのではないのでしょうか。四つのテストは、我々に勉強のきっかけを与えてくれているのです」。

「何があっても勉強を！」という先輩からの励ましの言葉である。少し話がそれるが、スティーブン・R. コヴィーの名著『7つの習慣』には、生きていく上で身に付けるべき習慣が、次のように上手にまとめられている。文科省の学習指導要領にいう『生きる力』を、日々の習慣という別の面から分かり易く解説している。教育を受ける立場の人間が心得ておくべきことを見事に言い表していると思う。

「7つの習慣」(The Seven Habits)

第一の習慣・主体性を発揮する (Be Proactive)

第二の習慣・目的を持って始める (Begin with the End in Mind)

第三の習慣・重要事項を優先する (Put First Things First)

第四の習慣・Win-Win を考える (Think Win/Win)

第五の習慣・理解してから理解される (Seek First to Understand, Then to Be Understood)

第六の習慣・相乗効果を発揮する (Synergize)

第七の習慣・刃を研ぐ (Sharpen the Saw)

7つの習慣についての詳細は、畑田耕一編著『双方向授業が拓く日本の教育—アクティブ・ラーニングへの期待』(116-117頁)に詳しく書かれているので参照願いたい。勉強することを忘れずに、日々力強く生きていこうではないか。

第7章 メディア・リテラシー 大量の情報を如何に選択するか

最近、情報科学が非常に発達し、いろいろな情報・データが簡単に手に入るようになり、それらをどんな方法で手に入れて、どのようにして取捨選択して自分のものにしていくか、あるいは人に伝えていくか、すなわち情報の評価・識別・活用能力、いわゆるメディア・リテラシーが求められる時代になってきた。これに関する教育が非常に大事になってきているのは言うまでもない。これについては、いろいろな意見が出された。

「今日のフォーラムの主題は道徳なので、数日前からインターネットで、いやというほど『道徳』を検索しまくりました。ずうっと読んでいくと、皆それぞれ違う考え方が書いてあって、結局、読めば読むほどわけが分からなくなるのですが、その中に、『この人の言ってることがちょっと自分と価値観が合うな』とか、『このページがいいな』とかいうのがあって、それらを手帳に書き留めて、今日のために何度も読み返してきたのです。欲しいと思った情報がすぐ手に入るのが昔と大きく違うところです。例えば、英語の単語や文章の分からないものでも、辞書なしで、すぐに意味が分かります。今の情報化時代・社会というのは素晴らしいと私は思

います」は、多くの情報があふれる今の社会の中で一般社会人として日常生活を送る池田くればロータリークラブ青少年奉仕委員長 R1 の、素直で偽りのない心境を表す言葉である。「夥しい数の情報の中から自分に必要なデータを選び出すための基準を持っていますか」と重ねて問うたところ、「分かりません。自分が見て、合う合わないかという判断しかできません」という応えであった。全ての小・中学校の授業のカリキュラムにメディア・リテラシーを組み込むのは、喫緊の課題である。

道徳に関する情報・データをインターネットで収集するというような情報収集とは別に、いわゆる SNS (Social Network Service) 、Twitter とか Instagram とかについての問題点が、高校生 A 君によって、次のように指摘された。すなわち、「Twitter や Instagram で提供されている情報が、社会にかかわることだけではなくて、Twitter で悪口が流れたりして友人関係を含む人間関係にも影響が及び、ネットいじめと言われるものに発展してしまうことがあります。情報を発信する側も、受ける側も、一旦その情報の言葉を自分の中で反芻して、それが本当なのかどうかを考えた上で、考えの隅に置くことはあっても、絶対に軸には持ってこないように気を付けることが大切です」というのである。

これに対して別の高校生 B 君は、「私は、人間関係についてのインターネット上の情報は、あまり信用しないことにしています。Twitter でこういう情報が流れているというのを聞いても、人間関係に関するものは自分が直接関わった出来事しか信じないのです。英単語を調べるなど、一般的な事実を調べたりするときは、自分で取捨選択するようと言われても、知らないものを調べているわけですから、どれが正しいかは分からないので、出来るだけ多くの情報を見て、どの情報にも同じことが記載されていれば信用するし、たとえ少しでも違うことが混ざっている場合は、それは自分の考えの中心には持ちこまないようにしています。これが私のインターネット上のデータ選択法です」と、自分なりの解決策を示している。この情報選択の意見について別の高校生 D 君は、「自分の欲しい情報を探すときには、多くの情報を集めて、それらにどれほどの正確度があるかを自分で考えていくこととなります。多くの情報が同じことを言っておればそれが信用できるし、そうでなければ、どれが本当なのかをより広いところから集めてきて探すというのが、自分の情報選択の仕方です」と述べ、欲しい情報は、自分でこれが正しい結果だと納得できるまでデータ収集の努力をするのだと話している。

「メディア・リテラシーに関しては、インターネット上には、不正確というよりは嘘のこと、自分の考えに合うようにねつ造した情報なども書かれています。インターネットに限らず、新聞、テレビなどの情報も、一寸おかしいのではないかと思うものがあります。また、ここまで報道する必要があるのかな、と思うプライバシーのデータがあつたりして、自分の頭で考えて取捨選択する能力が非常に大事な時代になったなと思います」という高校 1 年生 C 君の意見は、メディア・リテラシーにかかわる分野にも道徳的精神による裏付けが必要になっていることに、彼らが気付いてくれていることを示している。心強いことである。なお、最近の新聞で大きく扱われている記事の大部分は、非道徳的な事象にかかわるものである。もう少し社会の手本・模範となるような道徳的事象の具体例の記事を掲載できないのだろうか、と筆者は常に思っている。

この短い章をお読みいただくだけでも、最近の情報科学の目覚ましい発展が、一般社会人の日常生活に大きな効果・影響をもたらしていることは分かっていたであろう。それには、いわゆる生活の利便性のようなプラス面とともに、誤情報の急速な伝搬、個人情報侵害などのマイナス面が存在することを忘れてはならない。この情報科学のマイナス面の払拭、すなわち情報科学の公害防止は、上にも述べた一般国民の道徳的能力の向上を伴う一所懸命の勉強・努力によって、かなり達成できると思うが、最終的には、専門家である情報科学者の使命であり責務であることを、情報科学者は自覚し行動して欲しいと強く思う次第である。

第8章 まとめ

今日のフォーラムでは、「日本社会と道徳」を主題として討論を行い、いろいろな興味深いご意見を沢山いただくことができた。若干、意見が拡散して討論にそぐわないところもあったかもしれないが、その辺は家に持ち帰って、じっくりと考えていただいた上で、面白い結論が引き出せれば、あとでお知らせいただければ幸いである。最後に、国際ロータリー2660地区の井上瑛夫ロータリーバスターガバナーの今日のフォーラムについての「まとめ」のお言葉をいただいてフォーラムを閉じたいと思う。

「今日の集まりはフォーラムです。フォーラムとは自分の意見を言うところですから、最後に、今日の皆様のご意見ご討論を考慮しつつ、私の意見を言わせていただきます。

まず、四つのテストですが、これは非常によくできた道徳的基準であると思います。ロータリーで一般社会に広めるということについては大賛成です。日頃、この四つのテストを見ながら、社会で起きていることをいろいろと考えます。まず、新聞、テレビの情報には四つのテストには全く合わないものが多いです。つまり、みんなのためになるか？とか、公平か？とかという質問に、はい！と答えられない情報が多いのです。それで、あれは商業ビジネスというふうに私は割り切っております。ただし、NHKは違います。NHKはテレビを買っただけで受信料を徴収できるのです。これは裁判で認められています。NHKは民放と同じ立場ではないのです。NHKはこれをもっと言わないといけないと思います。

それから、今日、神社の話が出たのですが、日本の神道は日本の心の文化だと私は思っています。これに関わっているから日本人だと思うのです。戦後、神社を宗教法人としました。アメリカ人はそう思うのかもしれませんが、私は、宗教ではなくて、習俗に深く関わるものだと思っています。日本人の習俗、すなわち、その社会の全員に共通の生活・思考・行動様式にかかわっているのです。だから、神道は日本人の心の文化だと思うのです。これは私だけの考えかもしれませんが。

次に、日本社会と道徳の話ですが、この間、車を正規の検査をせずに検査部門がはんこを押して、検査をしたこととして出荷したという話がありました。例えば、納期に関係することであれば、車を発注した人にお店は来月の10日に納車できますよ、と言ったとします。ところが工場の方へ問い合わせたら、実は検査がうまくいっていないので13日になると言われた。本当は、3日延びますよ、と言わないといけないのですが、車を10日に欲しいと言っているお客さんに、そうは言いたくない。そこで、ある人が検査もせずにはんこを

押した。車はそのまま出荷され、お客さんはそれで満足している。このようなことが、お客さんのためになっているのかという問題が一つあります。もう一つは、それを隣で見ていた同僚が、そんなことしたら駄目だと言うのか、あるいは、そういうことがだんだん習慣化して、その部署全体でそういうことが行われるようになっても黙っているのかという問題です。言い方を変えるならば、納期は守らねばならないという会社の命令にどう対処するのかをその部署全体で相談して、例えば、検査の手を抜いてはんこ押したらいいのではないかという話になったときに、自分はどういう立場を取るべきなのかという判断を、ひとりひとりがきっちりとできるかということです。そういう判断が出来る人を育てる教育が望ましいのです。ヒットラーという独裁者がいました。あの当時、ドイツは民主主義の国です。ヒットラーは自分で独裁者になったのではなくて、選挙で選ばれたのです。民主主義というのは、国民が一所懸命勉強しないと、付和雷同に流れてしまう危険を孕んでいるのです。何が真実かを自分で考えて、それに従って行動できる人を育てる教育を行って欲しいというのが、私の感想でございますし、意見でございます」

四つのテストの日常生活における幅広い活用、日本の神社・神道についての卓見、ものづくり企業は優れた技術力とともにしっかりした道徳的背景を持たねばならないこと、それと民主主義国家の市民・国民は、一所懸命勉強して自ら考え行動できる人間にならねばならないという井上パストガバナーのご指摘、肝に銘じて置きたいと思う。

今、ふっと思いました。来年の教育フォーラムのテーマは、「AI と教育—四つのテストと道徳に照らして」ではどうだろうか。これについては、時間をかけて、慎重に検討したいと思います。

本日は本当に有難うございました。

出席者全員のお名前を以下に記す

フォーラム（2018年1月27日）出席者（順不同・敬称略）

市立西宮高等学校教諭 岡本博と飾森宏ならびに生徒4名（北野悠（2年男子） 関子博香（2年女子） 吉岡凌佑（1年男子） 高橋琉弥（1年男子））、阪大基礎工 田坂恵美子、豊中市教育委員会事務局学校教育課教務係係長 丹羽康一郎、同教務係主査 石走海景、大阪市水道局 北本靖子、元大阪大学技術職員 矢野富美子、日本学術振興会特別研究員 服部敬弘、元四天王寺学園教諭 尾野光夫、国際ロータリー2660 地区パストガバナー 井上暎夫、高知工業大学名誉教授 細川隆弘、(株)コンセプト 久保田拓鑑、池田くれはロータリークラブ青少年奉仕委員長 今井卓哉、豊中ロータリークラブ奨学生 Wong Ting Sam、大阪大学名誉教授 北山辰樹、大阪大学理学研究科教授 佐藤尚弘、大阪大学理学研究科国際交流センター 卓妍秀、ダイキン工業株式会社副参事 毛利晴彦

豊中ロータリークラブ会員

佐川正治、北村公一、木村正治、澤木政光、宮田幹二、戸部義人、松山辰男、大塚穎三、村司辰朗、米田真、真下節、榎田定子、小川佳伸、岩本洋子、都井正剛、武枝敏之、篠原厚、畑田耕一（司会）